

平成 29 年度 【 学園研究費助成金 < B > 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ ミヤシタ トアリ
氏名 宮下 十有

研究期間 平成 29 年度

研究課題名 小学生の映像表現活動を促す教材開発研究

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	宮下 十有	文化情報学部	准教授
研究分担者	亀井 美穂子	文化情報学部	准教授
研究分担者	鳥居 隆司	文化情報学部	教授

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

本研究の目的は、児童を主たる対象とし、タブレット端末と撮影、編集、プログラミングアプリを活用した映像表現活動に取り組むことにより、情報活用能力を総合的に育成するワークショップを開発・実施すること、およびその際の様子を記録する。現在継続的に実践研究している附属小学校の「デジタル・クリエーション」を中心に、映像表現活動を促す教材を開発する。近年、初等教育からプログラミング教育導入されることに加え、子どもたちの表現活動にプログラミングで学んだ技術や、タブレット端末のアプリを複合的に活用することを考え、既存の情報技術や機材を複合的に使い、児童が表現活動やそれに伴う問題解決を促す教材開発をする。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

2017 年 4 月より開始されている椋山女学園大学附属小学校のアフタースクール事業・「デジタル・クリエーション」において、継続的な映像やそれにつながる創作活動プログラムの実践を行った。また、毎回のアフタースクール実施後に、チューターとして参加している学生とともに振り返りを行った。機材など、随時導入し、教材の開発を行った。
2017 年 10 月 13 日名古屋市内の U 学童にてタブレットを用いた単発型ワークショップを実施。映像制作ワークショップの実施し、それらを検証した。
2018 年 2 月に豊田市で実施された「こども映画教室」の見学、2018 年 2 月に YCAM (山口県情報芸術センター) で実施された 35 ミリフィルムワークショップの見学と現地調査を行った。
2018 年 3 月発行の学部紀要にて、教材開発に関わる論文を発表する予定。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

アフタースクール「デジタル・クリエーション」では、継続児童と新規児童、あわせて20名（最終的に18名）に対して実施された。実施に当たっては、ファシリテーターとして亀井・宮下の両教員と、文化情報学部4年生3名、教育学部4年生1名、後期より文化情報学部3年生1名の合計5名の学生チューターが取り組んだ。

「デジタル・クリエーション」では、毎回、新しいデジタルな技術として、映像制作以外にも3Dプリンターや、スキャンカットなどの技術も紹介し、それらを使った「ものづくり」に自動的が主体的に取り組めるような環境を準備していた。毎回、児童のリクエストによって、個別に内容が異なるため、iPad mini®を毎回15台程度導入した。

映像制作教材として、逆再生映像の作品制作プログラム、ストップモーションアニメの制作プログラム、デジタル・クリエーションメンバーによる共同作品ジングルづくりプログラムを実施した。その後、これらの活動を踏まえ、児童たちの自由な作品制作に展開し、それぞれ個人・グループでの映像作品が制作された。

2017年10月に実施した学童で、ストップモーションや逆再生の映像制作ワークショップを実施した。ここでも映像表現の面白さを子供たちが協力し合う中で見出す様子を見出すこともできた。

映像表現を試みる中で、児童たちが映像そのものの面白さに気づき、逆再生、ストップモーションなどの映像ならではの表現を用いた作品を促すことができた。また、アフタースクールでのジングルづくりは著作権などに気づく切っ掛けにもなった。一方で機材に関して、基本アプリケーションやアプリケーションの不調による環境の違いには児童は対応が難しいこと、また三脚でのカメラの固定など、基本的なスキルを補助する教具の活用を学んでおり、環境を整えることの重要性が認識された。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①映像表現	②教材開発	③	④
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

論文：宮下十有・亀井美穂子・加藤良将・鳥居隆司 小学生の映像表現を促す教材の開発(1) 文化情報学部紀要 2018年、17巻 pp127-137 2018.3.31 (予定)

今回の研究に取り組んだ映像表現についての教材開発は、機材の発展に伴い、日々変化している。映像制作そのものの環境も激変している。調査で訪問した YCAM などの事例では、映像制作に加え、上映の仕組みを見せるワークショップへの新たな取り組みや、テクノロジーとサイエンスとアートへの取り組みと、地域と連携したプロジェクトの事例などをみることもできた。一つ一つの教材についての試行錯誤に加え、最新の学びの環境も理解し、取り入れ、より豊かな表現活動が促せるよう、研究を継続していきたい。